埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

The Relationship between Personal Tendency with Resignation, Self-affirmation, Narcissistic Personality, and Attitudes toward Friendship

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-02-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小島, 弥生, 田中, 道弘
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1341

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

諦観傾向と自己肯定感、自己愛および友人関係への態度との関連

The Relationship between Personal Tendency with Resignation, Self-affirmation, Narcissistic Personality, and Attitudes toward Friendship

小　島　弥　生・田　中　道　弘
KOJIMA, Yayoi　TANAKA, Michihiro

先行研究（田中・小島, 2019）に引き続き、諦観傾向尺度の構成概念妥当性を検討することが本研究の目的であった。諦観傾向の強さは自己肯定感との間に負の相関関係があると想定した。また、諦観傾向と自己愛との間の相関、諦観傾向と友人関係への態度（深い友人関係を望むか否か、広い友人関係を望むか否か）との間の相関についても探索的に検討した。予測どおり諦観傾向と自己肯定感の間には強い負の相関が示されたほか、諦観傾向と自己愛の下位概念である主導性との間に弱い負の相関がみられた。また、諦観傾向と友人関係への態度の間には性差がみられ、男性は諦観傾向が強いほど狭い友人関係を志向するのに対し、女性は諦観傾向が強いほど浅い友人関係を志向するという結果が得られた。

問題と目的

諦観傾向とは“その人の精神内部にのみ生じる個人的な感情、解釈、偏見に基づき事態を察し、諦めること”と定義されるパーソナリティ傾向である（田中・小島、2019）。尺度名に「諦め」という語を使わず、あえて「諦観」という語を用いているが、ここには“「表面的には悟っているようで、実は諦めきれていない心性」をも含む（田中・小島、2019, p.301）”ことができる表現としての「諦観」および「諦観傾向」の語を選択したという意がこめられている。

本研究では田中・小島（2019）に引き続き、諦観傾向尺度の構成概念妥当性を検討することを目的とする。田中・小島では大学生を対象に家族機能（家族との一体感の強さ）や恋愛への態度といった対人関係の捉え方の測度を用いて、また、大学生活への不安の持ち方に関する測度を用いて、諦観傾向との相関関係を検討している。そして、諦観傾向と家族機能および恋愛を大切で必要なものだと捉える態度との間には弱い負の相関を、諦観傾向と恋愛を刹那的なものだと捉える態度や大学

キーワード：諦観傾向、自己肯定感、自己愛、友人関係への態度、性差
Key words　：a personal tendency with resignation, self-affirmation, narcissistic personality, attitude toward friendship, gender

生活への不安の持ち方との間には弱い正の相関を、それぞれ見出している。いずれも弱い相関であることから、諦観傾向尺度が独自性の強い尺度であることを確認するとともに、諦観傾向の強い大学生は自分の日常生活でのさまざまな事象について、刹那的で表面的な「悟り、諦めた」捉え方をしやすいことが示唆されている。

本研究では田中・小島（2019）では扱っていなかった、（１）自己に関する態度、（２）友人関係に対する態度の２点について、諦観傾向との相関関係を検討したい。

自己および友人関係に関する態度と諦観傾向

友人関係が青年期の自己の形成に大きな影響を及ぼすことを指摘している先行研究は数多い。例えば、吉田（2003）は、自立性や自己の確立をしていく時期である青年期の若者にとって、友人関係は対人能力や性格、情緒などの自己の内心に関心を向け、理想の自己像と現実の自己像を比較することによって自己を評価するために重要な意味を持つとしている。いわゆる切磋琢磨をし、互いを高め合う友人関係の姿が想定されうる。

一方で、現代青年の友人関係には上記のような様相以外の様相もあることを指摘する先行研究も数多い。岡田（1993）は現代青年の友人関係を大きく３つの類型に分けている。１つが“群れ志向群”と命名された、友人関係において深刻さを回避し、楽しさを求め、友人と いつも一緒にいようとするなどの特徴を示すタイプ、２つ目が“対人退却群”と命名された、対人関係の深まりを避けること、他者からの評価を気にすることなどに特徴づけられる、互いに傷つけ合わないよう距離をおいた友人関係を志向するタイプ、３つ目が“やさしさ志向群”と命名された、従来の青年心理学で述べられてきた友人関係のあり方と合致するタイプである。ただし、岡田は“やさしさ志向群”において、２通りの解釈が考えられるとしている。１つの解釈は友人に対する気遣いを重視し、互いの内面に踏み込んで、傷つけあったり、甘えすぎたりすることを回避する防衛的な友人関係をこの群が志向している可能性である。もう１つの解釈は、互いを独立した人格として尊重し、認めあった上での親密さをこの群が志向している可能性である。いずれの解釈が妥当であるかは更なる検討が必要だと岡田は述べているが、“やさしさ志向群”が３つの友人関係のタイプの中では多数派であるとしているため、青年期の自己の確立における友人関係の役割は、現代青年においても一定数以上の者において重要であるといえる。

森田・井上（2015）では、岡田（1993）が指摘するような、互いに傷つけあうことを避けて表面的な関わりに終始する友人関係のあり方とともに、現代日本社会においては他者との良好な関係を構築するために自分で自分についての情報を相手にはっきりと伝えることが求められる社会状況になったことを鑑み、青年期の友人関係の希薄化や表面的なかかわりの問題を自己開示という観点で研究することの重要性を強調している。そして、知り合ったばかりの同性の友人、あるいは、親しい同性の友人に対する自己開示の量や自己開示を抑制する態度について比較検討し、知り合ったばかりの友人に対する自己開示の量に性差はみられない一方で、親しい同性友人に対する自己開示量は女性のほうが相対的に多いことを示している。また、親しい同性友人に対する自己開示を抑制する態度のうち、自分で

自分の問題を解決できるから自己開示する必要がないという態度（自己解消）や、相手に話をしてもしかたがないという態度（あきらめ）については男性の方が相対的に当てはまるとする一方で、自己開示するよりも気晴らしをして悩みから目を背けたいという態度（気晴らし希求）は女性の方が相対的に当てはまると回答することを示している。

また、友人関係と自己愛や自尊感情との関連を検討した小塩（1998）では、友人関係を「広い－狭い」次元と「深い－浅い」次元に分け、自己愛および自尊感情との関連を検討している。小塩の調査結果からは、広い友人関係（皆と一緒に楽しく付き合う関係）を自己報告する青年ほど自己愛が高く、深い友人関係（互いに気をつかうことなく親密に付き合う関係）を自己報告する青年ほど自尊感情が高いことが見出されている。これらの結果について小塩は、まず、自己愛の強さと広い友人関係との相関については“特定の相手と接するよりも多くの友人と接している方が、比較の対象となる友人が多いため、自分自身の肯定的感覚（＝自己愛傾向の高さ）を維持しやすい（小塩, 1998, p.288）”と考察しており、一方、自尊感情と深い友人関係との相関については、青年期における親しい友人関係が心理的適応に影響を及ぼすことを示した結果であるとしている。

では、諦観傾向と自己に関する態度（自己愛、自己肯定感）や友人関係に関する態度（広い友人関係なのか狭い友人関係なのか、また、深い友人関係なのか浅い友人関係なのか）はどのような関係にあると予想できるだろうか。

諦観傾向は自らが何かを察して諦める傾向を測定していると先行研究（田中・小島, 2019）および本研究では想定している。このような傾向の強い人は、“自己に対して前向きで、好ましく思うような態度や感情”である自己肯定感（田中, 2008）を抱きにくいと考えられる。諦観傾向の強さは自分自身に対する前向きな態度や感情とは相反することが予想される。一方で、自己肯定感とは類似するものの性質の異なる自己愛と諦観傾向の関係はどのように予想できるだろうか。田中・小島（2019）では仮想的有能感（自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚；速水・木野・高木, 2004）との間に弱い正の相関をみいだしていているが、この弱い正の相関は諦観傾向が悟りきっているようで実は諦めきれていないという心性であるとの捉え方を支持する結果と考えられる。ところが、仮想的有能感と異なり、自己愛には他者と比べた自己の優越の感情などのように自己と他者の比較が必要であったり、あえて他者との客観的な比較を軽視する自己の誇大視が含まれたりしているため、諦観傾向と自己愛との相関関係は仮想的有能感との間の相関関係とは異なるパタンになると考えられる。諦観傾向と自己愛との相関の方向性が予想できないため、本研究では探索的に検討を行うことにする。

また、諦観傾向と友人関係に関する態度との間に関しては、小塩（1998）の友人関係と自己愛・自尊感情との関連に関する知見を元にすると、自己肯定感（自尊感情のうち、自己を肯定的にとらえる態度・感情と考えることができる）の強い人ほど深い友人関係を築く特徴が想定されるため、諦観傾向の強い人は深い友人関係とは逆の浅い友人関係を志向することが予想される。一方、自己愛の強い人ほど広い友人関係を築く特徴が想定される

（小塩, 1998）が、諦観傾向と自己愛との相関関係に関する予想が立てにくいため、諦観傾向の強さと「広い－狭い」友人関係の次元との間の予想も同様に立てられない。さらに、友人関係の見方には性差が存在することが予想される（森田・井上, 2015）。以上のことから、諦観傾向と友人関係への態度との間の相関関係については、浅い友人関係との間に正の相関が想定されるという予想にとどめ、特に性差に関して探索的に検討を試みる。

方法

調査参加者と実施手続き

2019年10月に関東圏の５つの大学で、心理学関連の授業を受講している大学生に調査への参加協力を依頼した。１つの大学では調査への参加協力を成績評価の一部に反映させる約束を受講生と交わした上での調査実施であったが、その他の大学ではボランティアでの参加協力を依頼した。参加協力を成績評価に反映させる場合も含め、質問紙には無記名での調査回答を求めた（成績に反映させる大学では別紙に調査参加への感想を記入させる形で協力者を把握した）。

調査は授業時間の一部を用い、配布直後に回答を求め、回答後ただちに回収した。383部の質問紙を配布し、380部を回収した。回収した380部のうち、回答者が日本語を母語としない留学生であったケースや欠損値の多いケースである11部を分析対象外とした。したがって、359部が有効回答となった（有効回答率93.7%）。

質問紙の構成[1)]

質問紙には別の調査のための質問項目も含まれていた。本研究に関わる調査項目のみ、質問紙への掲載順に以下に詳細を述べる。

回答者の基本情報　回答者の学年と性別、年齢、そして出身都道府県の記入を求めた。留学生には出身都道府県の回答欄に「留学生」と記すよう求めた。

友人関係尺度　岡田（1993）の友人関係様式に関する質問項目を、小塩（1998）が２段階の因子分析を行ってまとめている「広い－狭い」因子と「浅い－深い」因子を参照し、計24項目を選定して用いた（**Appendix 1**）。

あなたが、ふだん友達とどのような付き合い方をしているのかをお伺いします」との教示文を示し、「1.全く当てはまらない」から「4.非常に当てはまる」までの４件法で回答することを求めた。

自己肯定感尺度　田中（2005）の自己肯定感尺度８項目（**Appendix 2**）について、回答者自身に当てはまる程度を「1.全く当てはまらない」から「4.よく当てはまる」までの４件法で回答することを求めた。

自己愛人格傾向尺度　小西・大川・橋本（2006）が作成したNPI（Narcissistic Personality Inventory）の邦訳版35項目を使用した（**Appendix 3**）。この尺度は「注目欲求」「誇大感」「主導性」「身体賞賛」「自己確信」の５つの下位尺度からなっている。各項目について回答者自身に当てはまる程度を「1.全く当てはまらない」から「6.非常に当てはまる」までの６件法で回答することを求めた。

諦観傾向尺度　田中・小島（2019）の諦観傾向尺度15項目（項目内容は結果の**Table 1**を参照）について、回答者自身に当てはまる程度を「1.全く当てはまらない」から「4.よく当てはまる」までの４件法で回答することを求めた。

結果

分析対象者の属性の特徴

分析対象者359人のうち２人が年齢の回答がなく、回答のあった357人での平均年齢は19.08歳（*SD*＝.927）、年齢範囲は18歳～23歳であった。大学１年生が253人（70.5％）と多数派であった。359人の性別の内訳は、男性187人（52.1％）、女性168人（48.6％）、回答拒否３人（0.8％）、無回答１人（0.3％）であった。

変数の整理

諦観傾向尺度　先行研究（田中・小島, 2019）では諦観傾向尺度の原項目として15項目を作成し、主成分分析を実施した結果（**Table 1**）、３項目の主成分負荷量が.40を下回ったため、残る12項目を用いて諦観傾向尺度得点を算出していた。本研究でも同様に主成分分析を実施したところ、先行研究では第１主成分での負荷量が低かった項目６（私は、人と一緒に行動出来ないだろう）の値が、本研究でのデータでは.625と高かった。なお、主成分負荷量が.40を下回った２項目（項目12と項目15）は先行研究と同様であったが、その負荷量の値はいずれも.30は上回り、先行研究の値よりも高くなった。そこで、15項目版（第１主成分への寄与率は41.7％）と12項目版（第１主成分への寄与率は47.9％）の両方で信頼性分析を行った結果、前者は α ＝.89、後者は α ＝.90となり、ともに信頼性が高かった。

以上の分析結果より、本研究では15項目版と12項目版の両方で他の変数との関係を検討し、結果を比較することにした。項目の評定値（15項目版では逆転項目が含まれているため、その数値は正項目に合わせて直した）を単純集計した値を諦観傾向得点とした。

自己肯定感尺度と自己愛人格傾向尺度　それぞれ出典の因子構造に従って得点化を行った。

自己肯定感尺度の８項目の信頼性係数は α ＝.85であった。逆転項目の評定値を正項目に合わせて直した上で単純集計し、自己肯定

Table 1　諦観傾向尺度　主成分分析結果

	項目	成分
11	周りは自分を必要としていないだろう	.82
8	どうせ，私の考えに賛同してくれる人はいないだろう	.79
5	きっと私は他者に受け入れられないだろう	.78
13	どうせ，頑張ったところで意味が無い	.73
3	どうせ，私の考えは理解できないだろう	.71
14	どうせ，達成感を感じることはないだろう	.70
10	人に期待すること自体，無駄なことだ	.69
9	そもそも，私は周りに期待していない	.68
7	私が傷つかないためには，人と距離を置くしかないだろう	.67
※6	私は，人と一緒に行動が出来ないだろう	.63
1	私は，物事に対して悲観的である	.58
2	私一人の意見では，物事は何も変わらないだろう	.53
4	私が社会に従ったとしても，何も変わらないだろう	.50
※12	結果はどうであれ，何事も挑戦したほうが良いだろう	.32
※15	私は，粘り強い方だ	.31

注：逆転項目（項目12, 項目15）は評定値を反転させてから分析した
※　田中・小島（2019）では尺度得点の算出から除外した項目

感得点（得点範囲は８～32）を算出した。

自己愛人格傾向尺度は５つの下位尺度ごとに項目への評定値を単純集計して得点化を行った。注目欲求得点（範囲は９～54）は α ＝.88、誇大感得点（範囲は９～54）も α ＝.88、主導性得点（範囲は９～54）は α ＝.87、身体賞賛得点（範囲は３～18）は α ＝.69、そして、自己確信得点（範囲は５～30）は α ＝.62となった。身体賞賛と自己確信の２下位尺度の信頼性係数がやや低かったが、以降の分析にはそのまま用いることにした。

友人関係尺度　友人関係尺度については小塩（1998）とは異なる因子構造を示していたため[2)]、本研究独自の変数の整理を行った。

24項目について最尤法・プロマックス回転で因子分析を実施し、因子負荷量がどの因子についても.40を下回った項目を除外することを繰り返し、最終的に14項目による因子分析の結果を用いて友人関係に関する変数を作成した。Table 2に示したように、５因子構造が得られ、第１因子は「友達から取り残されないようにする」「友達グループのメンバーからどう見られているか気にする」「話題についていけるよう気をつける」の３項目の負荷量が高いことから、小塩（1998）の１次因子分析の因子の１つである「気遣い」と項目内容が一致したため、同様に「気遣い」と命名した。第２因子は「お互いのプライバシーには入らない」「相手の考えていることに気をつかう」「お互いの領分にふみこまない」「互いに傷つけないよう気をつかう」の４項目の負荷量が高く、小塩（1998）の１次因子分析の因子のうち「一線を引いたつき合い方」と「気遣い」の２つの因子に分かれていた項目が集まった。そこで、この因子は「配慮」と命名した。第３因子は「冗談を言って相手を

Table 2　友人関係尺度　因子分析（最尤法・プロマックス回転）結果

	F1 気遣い（Ⅱ）	F2 配慮（Ⅱ）	F3 積極的楽しさ（Ⅰ）	F4 集団同調（Ⅰ）	F5 無難さ（Ⅱ）
22　友達から取り残されないようにする	.73	-.12	-.04	.16	.09
23　友達グループのメンバーからどう見られているか気にする	.73	.00	-.08	-.09	-.02
14　話題についていけるよう気をつける	.57	.11	.11	.11	.05
12　お互いのプライバシーには入らない	-.19	.69	-.06	.13	.11
14　相手の考えていることに気をつかう	.25	.59	.10	-.11	-.17
5　お互いの領分にふみこまない	-.14	.50	-.14	.02	.07
10　互いに傷つけないよう気をつかう	.25	.45	.05	-.04	.01
11　冗談を言って相手を笑わせる	-.07	.01	.81	.01	-.01
6　ウケるようなことをする	.01	-.08	.75	-.03	.06
20　みんなで一緒にいる	.07	-.03	.00	.77	-.03
2　１人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする	.00	.05	-.02	.64	-.05
19　まじめな話題にならないよう気をつける	.07	-.02	.01	-.05	.74
18　あたりさわりのない会話ですませる	.19	.04	-.13	-.10	.46
7　突然まじめな話をして友達をしらけさせない	-.11	.06	.21	.05	.45
因子間相関					
F2	.21				
F3	.21	.09			
F4	.38	.18	.23		
F5	.39	.35	.06	.34	

注（Ⅰ）広い－狭い因子を構成していると比定
（Ⅱ）深い－浅い因子を構成していると比定

笑わせる」と「ウケるようなことをする」の２項目の負荷量が高かった。この２項目はともに小塩（1998）の１次因子分析では「積極的楽しさ」因子を構成していた項目であったため、本研究でも「積極的楽しさ」と命名した。同様に、「みんなで一緒にいる」と「１人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする」の２項目の因子負荷量が高かった第４因子も、先行研究と同じ因子名である「集団同調」と名付けた。最後に、第５因子に負荷量が高かった３項目、「まじめな話題にならないよう気をつける」「あたりさわりのない会話ですませる」「突然まじめな話をして友達をしらけさせない」については、第２因子と同様に先行研究では「一線を引いたつき合い方」と「気遣い」の２つの因子に分かれていた項目から構成されていた。項目の内容から第５因子は「無難さ」と命名した。

以上のように、本研究の友人関係尺度21項目の因子分析の結果、14項目から５因子構造が抽出され、小塩（1998）の因子分析とは一部の因子の内容が異なっていた。ただし、本研究の因子分析結果の第３因子と第４因子は、小塩（1998）が実施した２次因子分析の結果のうち「広い－狭い」因子と同じ１次因子分析の因子となり、また、第１、第２、第５因子は、２次因子分析の結果のうち「浅い－深い」因子を構成している項目で構成されていた。そこで、第３因子と第４因子に負荷量が高かった計４項目の評定値を単純集計した値を「広い－狭い」因子得点とし、第１、第２、第５因子に負荷量が高かった計10項目の評定値の単純集計値を「深い－浅い」因子得点とした。

「広い－狭い」因子得点（範囲は４～16）の信頼性係数は α ＝.58、「深い－浅い」因子得点（範囲は10～40）の信頼性係数は α ＝.72であった。「広い－狭い」因子得点の信頼性係数が低い値であったが、このまま分析に用いることとした。「深い－浅い」因子得点は、得点が高いほど浅い友人関係を築く傾向があり、「広い－狭い」因子得点は、得点が高いほど広い友人関係を築く傾向があると解釈することとした。

諦観傾向尺度と自己肯定感・自己愛との相関

２種類（15項目版・12項目版）の諦観傾向得点と、自己肯定感得点および自己愛人格傾向尺度の５つの下位尺度の各得点との相関係数を算出した（Table 3）。15項目版と12項目版の両方で同様の相関のパタンが示されたため、ここでは12項目版と各変数との結果を中心に説明する。

まず、諦観傾向と自己肯定感の間には強い負の相関（r ＝-.72）がみられた。諦めやすい人ほど自分を前向きに好ましくはとらえていないという結果であった。次に、自己愛人格傾向尺度のうち、主導性との間に中程度の負の相関（r ＝-.40）がみられ、諦めやすい人ほど自分の意見や考えを明確に表出しよう

Table 3　諦観傾向と自己肯定感・自己愛人格傾向との相関（n ＝359）

	自己肯定感	自己愛人格傾向				
		注目欲求	誇大感	主導性	身体賞賛	自己確信
諦観傾向						
15項目版	-.720	-.214	-.275	-.427	-.154	-.245
12項目版	-.716	-.185	-.251	-.400	-.146	-.185

注　すべて１％水準で有意な相関であった

とする態度をとらないことが示された。自己愛人格傾向尺度の他の４得点との間にも弱い負の相関がそれぞれ得られた。したがって、諦めやすい人ほど、他者からの注目を好まず、自分の優秀さや容姿の良さを感じにくく、自分に自信がない可能性があることが示唆された。

諦観傾向と友人関係のとらえ方との相関

２種類（15項目版・12項目版）の諦観傾向得点と、友人関係尺度の因子分析結果からまとめた２つの得点との相関係数を算出した（Table 4）。先述の自己肯定感尺度や自己愛人格傾向尺度との相関係数と同様、15項目版と12項目版の両方で同様の相関のパタンが示されたため、ここでは12項目版との相関について説明する。

諦観傾向と「広い－狭い」因子得点との間には弱い負の相関（r =-.21）がみられた。諦めやすい人ほど狭い友人関係を構築している可能性が示唆された。一方、諦観傾向と「深い－浅い」因子得点との間には弱い正の相関（r =.15）がみられた。諦めやすい人ほど浅い友人関係を構築している可能性が示唆された。

友人関係の構築には性差が存在することを考え、男女別に諦観傾向得点と友人関係尺度の因子得点との相関係数を算出した（Table 5）。その結果、男女で異なる相関のパタンが示された。

男性（n =187）では、「広い－狭い」因子得点と諦観傾向との間に中程度の負の相関（r =-.39）が得られたのに対し、男女をまとめた相関分析では弱い正の相関がみられていた「深い－浅い」因子得点と諦観傾向との間には有意な相関はみられなかった（r =-.23）。つまり、諦観傾向の強い男性ほど友人関係が狭くなりやすいことが示されたが、友人関係の深さの次元では諦観傾向の影響が確認できなかった。

一方、女性（n =168）では、男性とは逆に「広い－狭い」因子得点と諦観傾向との間には有意な相関がみられず（r =.05）、「深い－浅い」因子得点と諦観傾向との間には中程度の正の相関（r =.38）がみられた。つまり、諦観傾向の強い女性ほど友人関係が表面的で

Table 4　諦観傾向と友人関係尺度の２因子との相関（n=359）

	「広い－狭い」因子[a)]	「深い－浅い」因子[b)]
諦観傾向		
15項目版	-.226**	.134*
12項目版	-.205**	.153**

* p<.05　** p<.01
a）因子得点が高いほど「広い」友人関係を志向していることを表す
b）因子得点が高いほど「浅い」友人関係を志向していることを表す

Table 5　諦観傾向と友人関係尺度の２因子との相関（男女別）

	「広い－狭い」因子[a)]		「深い－浅い」因子[b)]	
	男性（n=187）	女性（n=168）	男性（n=187）	女性（n=168）
諦観傾向				
15項目版	-.419**	.044	-.038	.356**
12項目版	-.388**	.053	-.023	.379**

** p<.01
a）因子得点が高いほど「広い」友人関係を志向していることを表す
b）因子得点が高いほど「浅い」友人関係を志向していることを表す

浅くなりやすいことが示されたが、友人関係の広さの次元では諦観傾向の影響が確認できなかった。

考察

自己肯定感・自己愛と諦観傾向

まず、予想通りに諦観傾向と自己肯定感との間には強い負の相関がみられたことから、諦観傾向が強い人は自分を前向きに好ましくとらえていないことがわかる。諦観傾向の強い人は日常生活の中で自分に関するさまざまな限界を察してしまい、現状の自己の姿を受け入れる諦観を示しても、その諦めの気持ちは現実の自己を肯定的にとらえる域には達しておらず、どこかで諦めきれない気持ちを内包している可能性を示唆するものと思われる。

次に、探索的に相関関係の検討を試みた自己愛と諦観傾向の関係については、自己愛の下位次元の中でも「主導性」との間に中程度の負の相関がみられた。なお、男女別にみても主導性と諦観傾向の間の相関関係に違いはみられなかった（Appendix 4）。つまり、諦観傾向の強い人は自分の意見や考えを明確に表出しようとする積極的な態度を取りづらいことが示され、諦観傾向の強さは自己に関する消極的な態度を表していること、また、他者との関わりにおいても積極的に関わることを諦め、避けていることを表していると考えられる。

友人関係への態度と諦観傾向

自己愛と同様に探索的な検討を試みた友人関係への態度との相関関係については、男性と女性で異なる結果が示された。男性では諦観傾向の強い人ほど狭い友人関係を志向しているのに対し、女性では諦観傾向の強い人ほど浅い友人関係を志向していた。この性差に関しては、友人との適切な距離を築く際の方略が男女で異なることを反映している可能性が示唆される。

新見・松尾・前田（2004）では中学生、高校生、大学生の男女を対象に友人との適切な心理的距離を保つ手段としての自己表明（自分の気持ちや考えを率直に伝えること）の役割について調査し、女子青年は男子青年と比べて「嬉しさや辛さの表明」を行う程度が高い一方、男子青年は女子青年と比べて「意見の表明」や「不満・要求の表明」を行う程度が高いことを示している。さらに、新見らは調査対象者が他者に対して望む表明のあり方（他者に率直に気持ちや考えを言って欲しいと望む程度）についても検討し、表明の内容は問わず、全体的に女子青年は男子青年よりも他者の表明を望むことも示している。新見らの調査結果からは、女性が自らの感情を友人に伝えることを好むのに対し、男性は感情よりも自らの意思や要望を友人に示すことを好むことが示唆される。言い換えると、女性は情緒的に友人とつながり、自らの感情の共有や受容といった深い次元での理解を友人に対して欲するのに対し、男性はある程度気心知れた間柄の中で自らの意見や要求を相手に認めさせる、説得や交渉を前提とした関係を友人との間に構築しやすい可能性が考えられる。

このように男女で友人関係を築く方略が異なると仮定した場合に、諦観傾向の強い男性や女性が友人関係について諦めの気持ちを抱いているとすれば、女性は深い次元での友人関係の構築を諦めて浅い友人関係にとどまること、男性はさまざまな相手と交渉することを諦めて狭い友人関係にとどまることを、そ

れぞれ選択しがちになる可能性が考えられよう。

ただし、友人関係への態度と諦観傾向との関係に関するこれらの考察には、研究上の限界があるため、さらに検討を重ねる必要がある。本研究で扱った友人関係尺度から作成した測度は、先行研究（小塩, 1998）と因子構造が異なっているだけでなく、小塩（1998）で示されている自己愛・自尊感情（本研究では自尊感情の一側面である自己肯定感を扱っているが）と友人関係との関連とが一部対応していないためである。小塩では性差の検討は行っていないが、広い友人関係を報告した者は自己愛が強く、深い友人関係を報告した者は自尊感情が強いとしている。これに対し本研究の分析データでは、男女で友人関係と自己愛・自己肯定感（自尊感情）との間の相関関係が異なっており（Appendix 4）、広い友人関係と自己愛との関連は男性でのみ弱い相関が示され、女性では主導性の因子のみが弱い相関があるだけで基本的に自己愛と広い友人関係との相関はない。また、深い友人関係と自己肯定感との正の相関が見いだせるのは女性に限ってのことである。よって、本研究で算出した友人関係への態度に関する測度が不十分であったために先行研究との知見の一部不一致がみられるのか、それとも、先行研究の知見が性差を考慮していないだけで友人関係への態度と自己愛や自尊感情との関係には性差が存在し、それゆえ、諦観傾向と友人関係への態度との関係にも本研究で得られた性差が存在するのか、現時点では結論が導き出せない。この点はさらにデータを収集して再検討が必要な課題である。

また、諦観傾向尺度についても、田中・小島（2019）と本研究では諦観傾向という概念が１つのまとまりをもつ尺度として測定可能かを検討するために主成分分析の実施にとどめているが、諦観傾向に何らかの下位次元が存在しうるのか、それとも１次元で測定するのが妥当な概念であるのか、今後も検討を重ねる必要がある。

引用文献

速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子（2004）．仮想的有能感の構成概念妥当性の検討　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学），*51*，1-8.

小西 瑞穂・大川 邦子・橋本 宰（2006）．自己愛傾向尺度（NPI-35）の作成の試み　パーソナリティ研究，*14*，214-226.

森田 美雪・井上 直子（2015）．大学生の友人関係における自己開示の深さと自己開示抑制の理由の関連：親しさの違いと性差に着目して　桜美林大学心理学研究，*5*，65-74.

新見 直子・松尾 紗織・前田 健一（2004）．大学生の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち　広島大学心理学研究，*4*，139-149.

岡田 努（1993）．現代青年の友人関係に関する考察　青年心理学研究，*5*，43-55.

小塩 真司（1998）．青年の自己愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連　教育心理学研究，*46*，280-290.

田中 道弘（2005）．自己肯定感尺度の作成と項目の検討　人間科学論究，*13*，15-27.

田中 道弘（2008）．自尊感情における社会性，自尊感情形成に際しての基準　下斗米 淳（編）シリーズ自己心理学第６巻 社会心理学へのアプローチ（pp. 27-45）金子書房

田中 道弘・小島 弥生（2019）．諦観傾向尺度作成の試み　埼玉学園大学紀要 人間学部篇，*19*，299-309.

吉田 浩子（2003）．大学生の友人関係：５つの大学におけるグループの特徴に関する調査から　川崎医療福祉学会誌，*13*，173-186.

脚注

1）本研究の着想は、埼玉学園大学人間学部人間文化学科を2018年度に卒業した藤戸唯鈴氏の卒業論文より得ている。卒業論文の作成に用いた質問紙を本研究のデータ収集に援用することを快諾いただいた藤戸氏に感謝したい。

2）小塩（1998）は岡田（1993）の友人関係様式に関する項目から27項目を用いている。まず、１次因子分析を実施し５つの因子（積極的楽しさ、集団同調、自己開示的関わり、気遣い、一線を引いたつき合い方）を見出し、次にこれら５つの因子得点の推定値を用いた２次因子分析を実施し、積極的楽しさ・集団同調・自己開示的関わりを「広い－狭い」因子、気遣い・一線を引いたつき合い方を「浅い－深い」因子を構成していると結論づけている。本研究では調査実施時の紙面の都合から、27項目すべてを用いず、小塩（1998）の１次因子分析において因子負荷量の小さかった項目を除外し、24項目のみ用いた。小塩（1998）と本研究とで因子分析結果が異なった理由の１つに調査に用いた項目数の違いが考えられる。

Appendix 1　友人関係尺度の項目一覧（小塩, 1998の因子構造との対応関係）

項目	２次因子	「広い－狭い」因子			「深い－浅い」因子	
	１次因子	積極的楽しさ	集団同調	自己開示的関わり	気遣い	一線※
1 友達と一緒にいる時でも別々のことをする			○R			
2 １人の友達と特別親しくするよりはグループで仲良くする			○			
3 お互いの約束は決して破らない						○
4 心を打ち明けて話をする				○		
5 お互いの領分に踏み込まない						○
6 ウケるようなことをする		○				
7 突然まじめな話をして友達をしらけさせない						○
8 相手に甘えすぎない						○
9 相手の言うことには口をはさまない						○
10 互いに傷つけないよう気をつかう					○	
11 冗談を言って相手を笑わせる		○				
12 お互いのプライバシーには入らない						○
13 相手の考えていることに気をつかう					○	○
14 話題についていけるよう気をつける					○	
15 意見や好みがぶつからないよう気をつける					○	
16 自分を犠牲にしてでも相手につくす				○		
17 楽しい雰囲気になるよう気をつかう		○				
18 あたりさわりのない会話ですませる					○	
19 まじめな話題にならないよう気をつける					○	
20 みんなで一緒にいる			○			
21 真剣な議論をする				○		
22 友達から取り残されないようにする			○		○	
23 友達グループのメンバーからどう見られているか気にする					○	
24 友達グループのためにならないことは決してしない					○	

R：逆転項目を表す
※　正しい因子名は「一線を引いたつき合い方」である

Appendix 2　自己肯定感尺度（田中, 2005）

1 私は、自分のことを大切だと感じる
R 2 私は、時々死んでしまった方がましだと思う
3 私は、幾つかの長所を持っている
4 私は、人並み程度には物事ができる
R 5 私は、後悔ばかりしている
R 6 私は、何をやってもうまくできない
R 7 私は、自分のことが好きになれない
8 私は、物事を前向きに考える方だ

R：逆転項目

Appendix 3　自己愛人格傾向尺度（小西・大川・橋本, 2006）

項目	注目欲求	誇大感	主導性	身体賞賛	自己確信
1 私にはまわりの人々に影響を与えられる生まれつきの才能がある			○		
2 私は控えめな人間ではない			○		
3 私はどんなことでもあえて挑戦する			○		
4 もし私が世界のルールを作れるなら,もっと世界はよくなるだろう		○			
5 いつも自分のやり方で，なんでもうまく切り抜けられる					○
6 注目の的になりたいと思う	○				
7 私は成功するだろう		○			
8 私は特別な才能を持った人間だと思う		○			
9 私はよいリーダーだと思う			○		
10 自己主張をする			○		
11 まわりの人々に影響を及ぼすような権威を持ちたいと思う	○				
12 自分の思い通りに人を使うのは簡単だ		○			
13 自分にふさわしい尊敬を受けることを強く主張する	○				
14 自分の体を自慢したいと思う				○	
15 決断には責任を持ちたいと思う					○
16 世間の目から見て抜きん出た人になりたいと思う	○				
17 自分の体を見るのが好きである				○	
18 チャンスがあれば自分をよく見せたい	○				
19 私はいつも自分の行動を理解している					○
20 物事をやり遂げるのにめったに人には頼らない					○
21 みんな私の話を聞きたがる			○		
22 欲しいものを全て手に入れるまで気がすまない	○				
23 ほめられたいと思う	○				
24 権力を持ちたいという強い意志がある	○				
25 鏡で自分自身を見るのが好きである				○	
26 注目の的になって目立ちたいと強く思う	○				
27 まわりの人は私の権威を認めているようである			○		
28 集団の一員よりもリーダーになるのを好む			○		
29 私は将来，偉大な人になるだろう		○			
30 どんなことでもみんなを信用させることができる					○
31 私は生まれつき，リーダーとしての素質を持っている			○		
32 私は誰かにいつか自伝を書いてもらいたい		○			
33 人前に出たとき，まわりの人が私に注意を払ってくれないと落ち着かない気分になる	○				
34 私は他の人よりも有能である		○			
35 私はまわりの人々よりずばぬけた人間である		○			

Appendix 4　自己肯定感，自己愛および友人関係の２次元の間の相関（男女別）
男性（n ＝187）の相関行列：左下、女性（n ＝168）の相関行列：右上

		諦観傾向（12項目版）	自己肯定感	自己愛					友人関係	
				注目欲求	誇大感	主導性	身体賞賛	自己確信	広い－狭い[a]	深い－浅い[b]
諦観傾向（12項目版）			-.767 **	-.108	-.324 **	-.387 **	-.208 **	-.103	.053	.379 **
自己肯定感		-.675 **		.118	.456 **	.442 **	.321 **	.181 *	-.070	-.366 **
自己愛	注目欲求	-.240 **	.357 **		.665 **	.599 **	.638 **	.367 **	.194	.107
	誇大感	-.210 **	.439 **	.762 **		.763 **	.598 **	.486 **	.064	-.134
	主導性	-.416 **	.578 **	.713 **	.762 **		.548 **	.405 **	.209 **	-.164 *
	身体賞賛	-.111	.281 **	.477 **	.521 **	.446 **		.251	.090	-.045
	自己確信	-.228 **	.432 **	.510 **	.547 **	.530 **	.243 **		.032	.128
友人関係	広い－狭い[a]	-.388 **	.242 **	.304 **	.178 *	.337 **	.071	.178 *		.276 **
	深い－浅い[b]	-.023	-.045	.214 **	.072	.115	.076	.115	.329 **	

* p<.05　** p<.01
a）因子得点が高いほど「広い」友人関係を志向していることを表す
b）因子得点が高いほど「浅い」友人関係を志向していることを表す